

## 実験団地・光が丘における〈社会〉形成の履歴

— 『光が丘新聞』の分析を中心に—

東京都市大学非常勤講師 塚田修一

### 1 目的

この報告の目的は、1980年代から90年代にかけて、光が丘地域に於いて、いかにして〈社会〉が形成されたのかを明らかにするものである。東京都練馬区光が丘は、戦中は成増陸軍飛行場が存在したが、敗戦後に連合軍に接収され、米軍の家族宿舎「グラントハイツ」として機能していた、いわゆる旧軍用地である。そして1973年に全面返還された後、都内有数の大規模な団地が建造され、1983年より入居が開始される。いわば“「米軍キャンプ跡地」に形成された実験団地”が、この光が丘である。

### 2 方法

本報告では、80年代に光が丘で行なわれた社会調査（竹中1990；森岡1992）を先行研究として携えつつ、光が丘における〈社会〉形成に重要な役割を果たしたと思われる、『光が丘新聞』を分析の対象とする。『光が丘新聞』は、1983年に創刊され、光が丘地域の住民を対象として発行されている、いわゆるコミュニティペーパーである（2014年現在、月に2回・約3万部発行されている）。

### 3 結果・結論

先述の先行研究に於いては、光が丘地域における、住宅階層間の格差、およびそれと関連した地域社会への参与の希薄化が問題として指摘されていた。そのような状況の中、『光が丘新聞』は、「光が丘フェスティバル」や「光が丘公園祭り」といったイベントを企画・開催したり、光が丘住民組織連絡協議会の設立の中心になるなど、光が丘における〈社会〉形成の紐帯となっていたことを示す。また、『光が丘新聞』の紙面の分析を通して、やはり先行研究に於いて指摘されていた「清掃管理や近隣レベルの問題解決に関する志向性の差」という問題を、この地域社会がいかに調停しようとしたのかを明らかにする。

このように、『光が丘新聞』を史料として、高度経済成長以後の日本が、米軍キャンプ跡地に産み落とした“実験団地・光が丘”における〈社会〉形成の履歴を描出していく。

#### 文献

竹中英紀、1990、「ニュータウンの住宅階層問題」倉沢進編『大都市の共同生活』日本評論社。

森岡清志、1992、「団地の住宅階層」『都市問題研究』第44巻第4号。

荻野昌弘編、2013、『叢書 戦争が産み出す社会 I 戦後社会の変動と記憶』新曜社。